

一

次の各問いに答えなさい。

問一 次の各文の——線部のカタカナを漢字に、漢字をひらがなに直しなさい。

- 1 算数のハッテン問題に取り組む。
- 2 激しい運動によりコキユウがあらくなる。
- 3 学業にセンネンする。
- 4 キケンな場所には立ち入らない。
- 5 墓穴をほる。
- 6 自然の神秘にふれる。
- 7 頬が紅潮する
- 8 他国からの干渉を警戒する

問二

次の①～④に入る漢数字を答えなさい。また、同じ漢数字が入る□を持つ四字熟語を後のア～エの選択肢からそれぞれ一つ選んで記号で答えなさい。

- ① 死に一生をえる
- ② 人寄れば文殊の知恵
- ③ 階から目薬
- ④ 聞は一見に如かず

- ア □位一体
- イ 一石□鳥
- ウ 十中八□
- エ □戦練磨

二

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

芭蕉ばしょうは、寛永二十一年（一六四四）、松尾家の次男として生まれました。誕生日は不明。生誕地は、伊賀上野赤坂町、現在の三重県伊賀市内です。幼少期は金作きんさく、長じて宗房むねふさと名乗りました（ほかにも別名があったようです）。

父は、松尾与左衛門よざえもん。松尾家は士分しぶん（武士の身分）の待遇ながら、日々の生活は農業でまかなわれていたようです。兄を半左衛門はんざえもんといい、また一姉三妹がありました。幼少期のことは、ほとんど伝わっていませんが、十三歳（数え歳、以下同じ）のとき父が他界し、松尾家は兄半左衛門が継ぎました。

この当時、次男以下の男子は、養子として他家にゆくのがふつうでした。ですから、武家の男子に生まれて、のちに名字みょうじ（姓せい）がかわるのは、ごくあたりまえでした。仏門にはいる、I 僧侶そうりよになる男子もいました。II、芭蕉は、俳諧はいかいという好きな道で身を立てようとした。養子、仏門、その他の三パターンのうち、三番めの人生行路①を模索もさくしたわけです。いつのころからか、俳句におのれの才能を開花させる道を求めた芭蕉だったのですが、III 実現するのは並大抵なみたいていではありません。IV それが、いつ、どんなきっかけであったかのかなどについては、ほとんどわかっていません。

へ 中 略 へ

そして、現在判明している第一作がこれです。

月ぞしるべこなたへ入いらせ旅りょの宿 松尾 宗房

右肩みぎかたに見える「松尾」はもちろん名字、「宗房」は本名をそのまま俳号に用いたものです。本来は、俳句の世界の名乗りは俳号のみでなされるべきものなのですが、この時点では、まだ俳人として自立していたわけではありません。この句は『佐夜中山集さよなかやま』というひとかどの書物（撰集せんしゅう）に掲載されているのですから、破格②のあつかいだったともみられます。それだけ作品が素晴らしいと評価されたのでしよう。

では、この句のどこがよかったのでしょうか。こまかい注釈ちゅうしやくが必要になってきますが、きちんとした理解のためには欠かせないことなの

で、いとわずにトキほぐしてみましよう。

季語は「月」、俳句で「月」といえば秋の月になります。「しるべ」は、案内とか手引きとかのことです。もうあたりは暗くなっているが、月の光が道しるべとなって導いてくれるままに、こちらへいらっしやい、V、といった意味になるでしょう。

要するに、この句全体が、月明かりのもとでかたる、旅籠の客引きのことばになっているのです。

話は単純ですが、それにしても言い回しは手が込んでいます。助詞「ぞ」は「しるべ」にかかっていったん話が切れます（文法的には「しるべなる」が正規の文）。「入せ」は動詞の命令形で、ここでも文脈は途切れ、そして、最後は「旅の宿」で名詞止め。上五、中七、さらに下五と、三か所それぞれで切れます。三段切れなどといいますが、めったにやりません。芭蕉はそれをとがめられなかった、いやそれどころか、ほめられたということになります。

ほかにもこの句は、高度な技法がひそんでいます。二点あります。つぎの文章を声に出して読んでみてください。

奥は鞍馬の山道の花ぞしるべなる。こなたへ入らせ給へや。

さきほどの芭蕉の句にそっくりの語句がみられます。そう、芭蕉はここから文句を借りてきたのです。和歌であれば本歌取りですが、これは和歌ではなく、「鞍馬天狗」という謡曲（能の台本。謡ともいう）の一節なのです。謡取りとでもいったらいいでしょうか、このころの俳句ではよく使われた流行の手法で、謡曲が頭に入っていないとできないわざです。

もう一点は、「入せ旅」のところ。本来の謡は「入らせ給へ」ですが、その「タマエ」と「タビノヤド」と「タ」の音が重なっています。いわゆる掛詞です。これも謡を用いた和歌的技法ということになります。高度な知的遊戯が織り込まれています。二十歳にしてこれほどの腕前をもっていらしたのです。句会でも喜ばれたことでしょう。ただ、こうしたことは遊びに凝った句づくりが、詩心をどれほどそそるかとなると、かなりあやしいものです。

問一 〓線部①～③のカタカナを漢字に、漢字をひらがなに直しなさい。

問二(1) 空欄 I 〓 IV にあてはまる語句として適切なものを、それぞれ次のア～オから選んで記号で答えなさい。

- ア ただ イ しかし ウ つまり エ なぜなら オ もちろん

(2) 空欄 V に入る語句として、最も適切なものを次のア～エから一つ選んで記号で答えなさい。

- ア 一緒にいっしょきれいな月を見ましよう
イ 私が道案内をしてあげますよ
ウ ここで旅を終わりにしましよう
エ ここが今夜泊とまる宿ですよ

問三 〓線部A「養子として他家にゆくのがふつう」とありますが、芭蕉は武家の次男に生まれながら、どういった道を志したのでしょうか。次の一文の空欄に当てはまる語句を文中より七字でぬき出して答えなさい。

芭蕉は 〓七字〓 する道を志した。

問四 ——線部B「破格のあつかいだっ」とありますが、ということが「破格のあつかいだっ」のでしょうか。その説明として最も適切なものを次のア～エから一つ選んで記号で答えなさい。

ア 『佐夜中山集』という俳句の書物であるのにもかかわらず、芭蕉が俳号ではなく本名で自分の句をのせたこと。

イ 『佐夜中山集』という格式の高い書物に、武家の次男である芭蕉の句がのせられたこと。

ウ 武家の次男であるのにもかかわらず養子として他家にいかずにいることが許されたこと。

エ 『佐夜中山集』という立派な書物に、俳人としてまだ認められていないような芭蕉の句がのせられたこと。

問五 ——線部C「そっくりの語句がみられます」とありますが、そのそっくりの語句をぬき出して、全て平仮名にして四字と七字で答えなさい。

問六 ——線部D「いわゆる掛詞です」とありますが、「掛詞」とは和歌の表現技術の一つです。その「掛詞」の説明として最も適切なものを次の

ア～エから一つ選んで記号で答えなさい。

ア 同じ音で違う意味をとることができる言葉をつかって、一つの語に二つの意味を持たせる技法。

イ 昔に作られた有名な歌の一部を取り入れて、その歌の内容とともに新たな意味合いも込める技法。

ウ 最後を名詞で終わることによって、余情を感じさせるような技法。

エ 本来の語句の順序とは逆にして、意味を強調させるようにする技法。

問七 本文中に登場する「松尾芭蕉」と同時代に活躍した人物を次のア～エから一つ選んで記号で答えなさい。

ア 雪舟 イ 世阿弥 ウ 清少納言 エ 近松門左衛門

三

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

A 玄関の床に正座して、お姉ちゃんを待つことにした。

すぐに足が痺れ、女座りに変えざるをえなかった。そこでお姉ちゃんが帰ってくるまで、女座りでもオーケーにした。お姉ちゃんがドアを開けたら、正座に戻すつもりだ。これはズルでもなんでもないとふたりの意見が一致した。法事や祥月命日でお坊さんがお経をあげているあいだ、朝日も富樫くんもこの方法で乗り切っていた。

しばらく、ふたりはなにも話さなかった。

朝日が考えていたのは、やはり「どのくらい怒られるか」だった。いくらお姉ちゃんでも、富樫くんがいるのだから、そうひどくは怒らないと思うのだが、テレビを壊したとなると話はべつになるかもしれない。「なんてことしてくれたのっ！」と最初から全開できてもおかしくない。激しく怒るとき、お姉ちゃんは目が吊り上がるだけでなく、眉毛も逆立って、相当怖い。朝日の頭や背中をばちばち叩くこともある。そんなに痛くないが、叩かれているところを富樫くんに見られるのはいやだ。

もし富樫くんと一緒にいるおかげで、お姉ちゃんが怒りを抑えたとしたら、富樫くんが帰ったあとが本番だ。これはこれでいやだった。長くなるに決まっている。寝るまで文句を言われる。次の日も、ひよっとしたらその次の日もつづくかもしれない。だってテレビを壊したんだから、とそこまで考え、思い出した。ああ、そうだ。お父さんが帰ってきたときにも、きつとまた、最初から怒られるんだ。

「ただいま」と帰ってきたお父さんにお姉ちゃんは「お帰りなさい」も言わずに、「ちよっと、お父さん。朝日が、たいへんなことをしてくれただんだから」とプリプリした口調で大げさに言いつけ、お父さんが「お。どうした朝日」とのんきに答えたら、そののんきさに腹を立て、「朝日、ほら、自分の口で言いなさい。お父さんに謝ることがあるんでしょ。フニャフニャしないで！」と朝日を怒鳴りつけるんだ、絶対。

「はあっ」

深いため息が出た。

「はあっ」

富樫くんも同じようなため息を吐いた。目と目を合わせ、なんとなくなぞく。そのときだった。「ただいまー」と玄関ドアが開いた。水玉

の開襟シャツに紺色のスカートを合わせたお姉ちゃんが茶色いバッグを肩から下げて帰ってきた。後ろ手でドアを閉めようとして朝日と富樫くんが気づき、ぎよっとしたような顔をした。

「なに？ なんなの？」

朝日と富樫くんは素早く正座に直り、おでこを床に付けた。「ごめんなさい」とまず朝日。

つづけて富樫くんも「ごめんなさい」。

「だから、なに？」

「テレビ、壊れた」

「虹が消えないです」

「チョット、磁石を、な？」

「うん、チョット」

「え？」

お姉ちゃんは眉間に皺を寄せて靴を脱ぎ、ふたりのあいだを大股で通り抜けた。居間に飛んで行ったようだ。朝日と富樫くんも立ち上がり、あとを追った。居間に着くと、お姉ちゃんがテレビの前にいた。スイッチを入れ、テレビが映るのを待っているようだ。

浮き出るように画面に映像があらわれた。もちろん虹も出ている。天女の羽衣みたいに画面を彩っている。

お姉ちゃんは何でかゆっくりと朝日と富樫くんを振り向いた。驚きでいっぱい顔をしていた。朝日と富樫くんが「ね？」というふうにならずと、なぜこうなったのかの説明を改めてふたりに求めた。

へ 中 略 へ

「あ、磁石をチョット近づけたんです」

富樫くんが割って入った。

「うん、チョット近づけただけで、わーっと虹が出て」

朝日が言うと、お姉ちゃんが「チョット？」といかにも怪訝そうに繰り返したあと、「なんでそんなことしちゃったのサ」とひとりごち、朝

日に実際にやってみよう命じた。

朝日はテレビの上においていた磁石を手を取った。そのときだ、急に思った。もしかしたら今回のことで磁石を取り上げられるかもしれない。「朝日に磁石を持たすとロクなことしない」とかなんとか言われて……。スン、とちいさく鼻息を漏らし、朝日は磁極をテレビ画面に向けた。それだけで新たな虹が出現し、揺らめいた。

「ほんとだ」

お姉ちゃんがつぶやいた。

「こうすると、もっと」

朝日は磁石で円を描いた。まさに虹でできた X がひるがえっているようだった。何人もの天女が脱ぎ捨てた羽衣がひらひらと、ふわふわと浮遊している。

「きれいだ」

朝日の口からつい漏れた。そばで突っ立つ富樫くんも「きれい」とつぶやく。

「うん」

お姉ちゃんも思わず同意してしまったようだ。視線はテレビ画面をたゆたう虹に釘付けだった。お姉ちゃんの目は、初めて見た「とてもきれいなもの」に興奮しているようだった。

「でも、どうしよう」

口を開けてテレビ画面を見ながら、お姉ちゃんが小声でひとりごとを言った。お姉ちゃんはほんとうに困っているようだった。テレビが直るかどうか、朝日たちを怒るのを忘れるくらい、不安だったようだ。「とにかく」と手首を返して腕時計をたしかめ、「アリマさんに電話してみろ」と言った。

十五分もかからず、アリマさんが到着した。お姉ちゃんが玄関で迎え、居間に案内する。

「これなんですけど」

お姉ちゃんがテレビを示すと、アリマさんは「ははーん」と顎あごに手を当てた。大ぶりの工具箱を床におろす。朝日と富樫くん目の前だった。ふたりはテレビから少し離れたところで所在③なく体育座りをしていた。

「びっくりしたよね。だいじょぶ、だいじょぶ」

アリマさんは朝日と富樫くんを交互こうじに見て、声をかけた。

アリマ電器店のアリマさんは腰が低く、背が低い。そして頭がいくぶん大きい。眼鏡をかけているので、フクスケというよりハカセくんという印象だ。色が白くて、癖くせっ毛で、顔のかたちが電球に似ている。ソケットを差し込こめばピッカリ光りそうだ。

朝日は、普段ふだん、アリマさんを少しだけ軽んじていた。いまもそのような気分だった。アリマさんにテレビが直せるのだろうか。だって、アリマさんがくるまでに、お姉ちゃんも磁石を使って虹をたくさん出してしまった。テレビ画面は、朝日が見るところ、もう取り返しがつかない状態である。

「ちよっと、その磁石、貸してくれるかい？」

朝日は手に持っていた磁石をアリマさんに差し出した。「え、アリマさんまで？」と思った。「これ以上ワヤにする気か」とも。でも、ちがった。全然、ちがった。「サンキュー」と磁石を受け取るやいなや、アリマさんは磁石をテレビ画面に向けた。窓拭ふきをするように磁石を動かすと、なんと、全部の虹がテレビ画面の奥おくに入っていくように消えてなくなったのだ。手品か！ 引田天功ひきたてんこうか！ アリマさん、なまらカツコいい！ ハカセくんデピッカリくんのアリマさんが！ こんなに！ あんまり見事すぎて可笑おかしくなった。笑Fいが止まらない。仰あお向けにひっくり返って、足をばたつかせた。富樫くんもお腹なかを抱かかえてヒーヒー笑った。「すごい、すごい」と悶もだえている。「なに笑ってんの」と言うお姉ちゃんも笑っていた。朝日たちにつられてアリマさんも表情をゆるめた。両手で磁石を持ったまま、首をかしげ、もじもじと微笑びしょうした。

(朝倉かすみ『ぼくは朝日』)

問三 — 線部B「富樫くんが帰ったあとが本番だ」とありますが、それはなぜですか。その説明として最も適切なものを次のア～エから一つ選んで記号で答えなさい。

- ア 富樫くんがいる間は忘れていたけど、テレビが壊れてしまった原因である磁石をお姉ちゃんにとられてしまうと考えているから。
- イ 富樫くんが帰ってからは、お姉ちゃんだけじゃなくお父さんも加わってたくさんの人に同時に怒られると考えているから。
- ウ 富樫くんがいる間は怒りを抑えていたお姉ちゃんが、富樫くんが帰ったあとは長い間怒り続けると考えているから。
- エ 富樫くんが帰ってからは、テレビが直るまでテレビを観ることを許してくれなくなり、楽しみがなくなってしまったと考えているから。

問四 — 線部C「うん、チョット」とありますが、これは誰のセリフだと考えられますか。次のア～エから一つ選んで記号で答えなさい。

- ア 朝日
- イ 富樫くん
- ウ お姉ちゃん
- エ アリマさん

問五 — 線部D「ワヤ」、E「なまら」はそれぞれ北海道などでみられる方言である。それぞれ本文中ではどのような意味合いで使われているか、他の言葉に言いかえて答えなさい。

問六 — 線部F「笑いが止まらない」とありますが、なぜこのようになったと考えられますか。それを説明した次の文の空欄に当てはまる語句をそれぞれ、①は十三字、②は八字で本文中からぬき出して答えなさい。

①
10

だと思っていたテレビだったのに、

アリマさんが②

に磁石を動かしただけで、きれいに直ってしまったから。

問七 本文中

X

 に入る言葉として最もふさわしいと考えられるものを本文中から五字でぬき出して答えなさい。

問八 本文中の

やいなや

 と同じ用法の「やいなや」を使って短文を作りなさい。ただし、解答には主語と述語を必ず使いなさい。また、本文の語句や文を利用しただけの解答は不正解とします。